編集後記

68巻1号をお届けする．COVID-19の流行から2年以上経過し，2022年1月末日現在，世界中で3億6千万人が罹患し560万人が亡くなったが，なお変異株の出現とその蔓延が次々に起こり，いまだ先の見通せない状況が続いている．私事ながら，筆者は本務校から研究休暇を取得して昨7月以来海外で生活してきたため，滞在する国によってワクチン接種の手続きやその接種証明の発行等に多少の違いがあること，また感染状況の推移によって各国の対応も日々変更されることを実感してきた．諸行無常，先のことは分からないという真理をあらためて実感する半年であった．しかし，ワクチン開発とその接種の速やかな進行によって，まだまだ地域間格差はあるものの，発生当初とは状況が違ってきており，次第に社会は落ち着きを取り戻しつつあるようにも感じられる．

本号には，原著論文1本，総説1本，研究ノート1本，随想・医史学と私を1本，ひろば3本，資料1本，そのほか例会抄録6本，書評7本，書籍紹介2本を収載することができた．このうち総説と書評には「感染症」をタイトルに掲げたものがあり，書評にはこれ以外にも公衆衛生に関する書籍を扱ったものが散見される．医史学という領域の性質上，パンデミックの状況に対応する内容がすぐに本誌紙面に現れることは難しい面もあると思うが，会員諸氏が現在進行形の世界的危機と関わらせつつ各自の研究を発表することに対して，本誌編集に携わる者として心から敬意を表する．また，原稿不足の状況が完全に解消されたとは言えない状況が続いているので，会員各位，特に例会発表をされた諸氏に対して，ぜひ論文作成と投稿を期待する次第である．

（町　泉寿郎）